

第 2 回 大学入試のあり方に関する検討会議について

2020 年 2 月 7 日に大学入試のあり方に関する検討会議が開催された。

15:00 から 17:00 までの予定で、文部科学省 3 階 3F1 特別会議室で行われた。

一般傍聴者は人数制限があったため 60 名程度であり、それ以外の傍聴者は別室のパブリックビューイングでの傍聴となった。テレビカメラも 2 台ほどが撮影していた。

今回の議題は以下の通りである。

1. 令和 3 年度大学入学者選抜に係る大学入学共通テストの報告
2. 中央教育審議会（第 124 回）における意見の報告等
3. 過去の検討経緯の整理
4. 委員からの意見発表
5. その他

まずは、事務局より前回欠席だった委員（宍戸委員、渡部委員、芝井委員）の紹介があった。今回は荒瀬委員と両角委員の両名が欠席であり、岡委員の代理として河野委員が出席していた。

議題 1 について、事務局より資料 1-1 を示し、記述式見送りに伴う来年度の共通テストの変更点について報告があった。

これに対して柴田委員より成績提供が 1 週間早まって元に戻ったことに対する感謝の弁があった。

15:15 頃から、議題 2 について、事務局より中央教育審議会の意見として資料 2 が読み上げられた。また、参考資料 2 の大学入学者選抜関連資料集についても目次を紹介し増補したことを報告した。

これに対して末富委員は、英語 4 技能・記述式に特化しがちなので、高大の接続として全教科のバランスを見ながら視野の広い検討を要望した。

ここで萩生田文部科学大臣が到着し、挨拶した。

15:25 頃から、資料 3-1、3-1-1、3-3-2 に沿って時系列に整理した過去の検討経緯について報告があった。

英語 4 技能の評価については 14 項目にわたる課題があり、それぞれ問題点は認識し、課題解決に向けて努力はされたが、枠組みの中では解決ができなかった、と述べた。

記述式についても、課題が指摘され、2 回のプレテストを通じて検証しつつ改善の努力を

していたが、大幅な改善は困難であるとの判断で見送りとなった。

15:45 頃より質疑応答が行われた。主な発言の内容は以下の通りである。

- 益戸（UiPath 株式会社）委員：
唯一の民間企業の委員として意見を述べる。課題・問題点を洗い出し、多角的な検討が必要である。これまでは結論が先に決まっており、2020年という目標に縛られ過ぎた。とりまとめではやれることとすぐできないことを見極め、将来へ課題を残すことも大切である。
- 末富（日本大学）委員：
リスク・技術的制約を踏まえた再検討が必要である。学習指導要領と民間試験は対応しているのか疑問が残る。民間企業への委託は妥当だったのか？2016年3月の高大接続システム改革会議の最終報告では、民間試験の利用は決定ではなかったが、その後の文科省の決定では積極的利用に変わっていた。会議がない間の判断はどうなっていたのか？
- 塩崎課長：
学習指導要領と民間試験の整合性については、目的や試験問題などを見て専門家が判断した。また、会議がない間も連絡協議会などが開かれて議論は進められていた。ただ、会議の詳細が必ずしも確実に引き継がれなかったかもしれない。
- 渡部（上智大学）委員：
区別して考えた方がよいことがある。4技能の評価と民間試験はイコールではない。CEFRの対応表には目的が異なるテストが並んでいる。また、過去の成果を見る到達度テストと将来の能力を見る熟達度テストは分けて考えるべきである。それから、海外の事例を検証した痕跡がない。
- 塩崎課長：
海外の事例については検討した。また、4技能評価は実施手段を検討して、入試センターでも各大学での実施も難しいということになり、実績のある民間試験を利用することになった。それから、到達度テストと熟達度テストについては、新テストとして2種類のテストを検討した。（高校生のための学びの基礎診断のことを指していると思われる）
- 小林（日本私立大学協会）委員：
学習指導要領との整合性の指摘は過去にもあった。結論付けが強引だったのではないか？
- 塩崎課長：
宿題とさせていただく。
- 末富（日本大学）委員：
会議が中心であり、一方で、個人や団体から寄せられた意見はどのように扱われたの

か？いろいろな人を招いて意見を聞くべきである。

- 芝井（日本私立大学連盟）委員：
私大は多様な入口を持っているので、共通テストがすべての受験生を縛っていると考
えないでほしい。英語は 4 技能でなくても、3 技能でもかなり判断できる。共通テス
トに過大な課題を押し付けたことが原因であるとする。

16:20 頃から議題 4 として委員からの意見発表があった。

- 川嶋太津夫（大阪大学）委員
AO 入試などが広がり、学生は多様化してきている。学力の二極化が進み、大学 1 年
生が高校 4 年生であるかのように補完教育が必要になっている現状もある。その中
で、高校教育改革と大学教育改革とともに多面的・総合的に評価する大学入試改革を
行う高大接続が必要となってきた。そのような前提のもとで、本会議の論点を以下の
様に整理する。
 - 本会議のアジェンダを委員で共有することが必要
 - 大学入試のどう位置づけるか
 - 学習成果を誰が評価するか
 - 個別試験との役割分担
 - 大学入試における公平性をどうするか
- 牧田和樹（（一社）全国高等学校 PTA 連合会）
団体としての意見ではなく、地方の経済人としてあくまで個人の考えであることを前
置きして以下のような意見を述べた。
現在の高校生はみんなが行くから高校に行っているという現状があり、半数は学習指
導要領をマスターしていない。日本では、多くの洋書が翻訳されていたり、高機能な
翻訳機があったり、本当に英語が必要なのか疑問である。
英語 4 技能の評価は「読む」だけでも十分だと考える。その他の 3 技能も、記述式
の出題も大学側が必要であると考えれば、共通テストではなく各大学が実施すべ
ばよい。これまで通りのセンター試験を実施すべきである。みんなが一様に小中高大
と進む単線型の教育ではなく、高校から選択肢を広げていく複線型の教育にしていく
べきだ。

発表のあと、萩生田大臣が退席し、他の委員からは以下のような意見が述べられた。✕

- 河野（国立大学協会）委員：（岡委員の代理出席）
現在いる長崎県は離島が多く、移動も大変なので、地域格差・経済格差を考慮してほ
しい。
- 清水（筑波大学）委員：
前提が何であるか、検討すべきことはなにか射程の明確化は必要である。時系列では

ないまとめ方もした方がよいのではないか？

- 小林（日本私立大学協会）委員：
現在の高校生は多様性があり，共通テストでまとめてやることに無理がある。多様性には対応できない。
- 末富（日本大学）委員：
意思決定の権限が錯綜している。権限体系の整理が必要である。

次回の第3回会議は2月13日(金)15:00~17:00に開催される予定である。